

漢代に置かれてみた各地の工官中、主として蜀・廣漢の兩官で作られ、其等の作品には、形態、圖文並びに銘辭の形式に共通せるものが認められることが指摘され、ついで『漢書』百官公卿表の缺を補ふべき工官の職制が考證され、また工人の種類が論及され、漆器製作の過程が明にされてゐる。次に博士は、右の兩工官の外に、中央の少府管轄の考工、供工の性質を究め、更に其等の製作に係かる漆器が、前記兩工官の作品と、技巧の細部や圖文の筆致などの點で差違のあることを注意されてゐる。そして最後に、施文、銘辭形式から看取される後漢以後の官工技藝の衰微の事實に就いて暗示されてゐる。附録として添へられた文獻目錄もた一切を網羅して研究者にこよない指針を提供してゐる。

本書に於いて吾人を敬服せしめるものは、資料の蒐集に注がれた博士の多年に亙る努力と、例へば銘帶の擴大寫眞に認められるが如き圖版作成上の周到なる配慮であると共に、博士の精緻なる考古學的考察と苦心になる銘辭の釋讀とである。此の際、看却なしいのは、博士が考究に當たつて、同じく工官の作に係かる銅器を絶えず念頭におかれてゐる態度である。敘上によつて明白なやうに、本書は、其の豊富かつ斬新なる集成によつて學界の渴を醫すのみでなく、漢代漆器の基本的勞作、ひいては當代文化の銳利なる側面として、研究者はもとより、更には汎く東亞の文物に關心をもつ人々を啓發するところ尠くないであらう。其れと共に、本書によつて漢代漆器研究の基準を樹立された博士が、近き將來、その蘊蓄を傾けて支那古代漆器に關する總括的著作を公に

され、以つて後學の徒を教導されることを深く冀ふものである。
 (舊菊館版。本文、七〇頁。卷首圖版、一葉。圖版、四七葉。桑名文星堂發行。賣價、參拾壹圓七拾五錢)(角田文衛)

彙報

讀史會

例會 三月十三日夜、陳列館演習室に於いて例會を開く。出席者讀史會以下約三十名。座談會の形式により「國史學の問題」を主題として、先づ西田教授より問題の提示があり、各々立つて意見を開陳、談論頗る盛んであつた。就中皇國史觀の問題、國史學徒と軍隊もしくは勤勞奉仕とに就いての體驗談などには傾聴すべきものが多くあつた。

西洋史讀書會

例會 昭和十八年度第一回例會を一月二十七日午後一時より陳列館賞賓室にて開催。出席者は、鈴木、井上兩助教授以下十二名。

一、ナポレオンの對英長期戰

豊田 堯氏

例會 昭和十八年度第二回例會を三月十日午後二時より原教室にて開催。出席者は、原教授、鈴木助教授、村田、中山兩講師以下九名。

一、第一次大戦前後に於ける印度の政治改革

上之親 夫氏

地理學談話會

例會 昭和十八年十二月一日(水)午後二時より地理學實習室にて開催。北京の華北綜合調査研究所研究員として活躍せられつゝある田中秀作氏から、北支現在の一般事情、特に農村の實態及び農村聚落について興味ある實地踏査談を聞くことを得た。席上、持參せられた北支農村聚落の寫眞多數を公開せられ有益であつた。出席者十五名。

一、北支の農村聚落に就いて

田中 秀作氏

昭和十八年十二月十一日(土) 午後三時より地理學實習室にて左記の研究發表を行つた。出席者十三名。

一、印度の獨立運動

岡本 信太郎氏

一、南方水産開發の地理學的研究

吉田 敬市氏

昭和十九年三月十八日(土) 左記の研究發表を地理學實習室にて行つた。出席者十名。

一、ビルマ農村の復興とその米産

三上 正利氏

考古學教室の南九州遺跡の調査

昨年十二月と本年一月との兩度、細川侯爵の援助を受けて考古學教室の事業として各二週間に互る同地方の古墳墓並に史前遺跡に就いての調査を實施した。

第一回は梅原教授、今井副手がこれに當つて、十四日に出發、熊本縣下に於いて次回到精査を行ふ可き玉名郡江田町船山古墳と

球磨郡免田町戈岡古墳とを視察した上、鹿兒島縣に入つて、新たに見出された櫻島武の貝塚を試掘し、大隅の高山町、大崎町に於いて各々古墳を實査、宮崎縣では兒湯郡持田村に於ける六十餘の古墳群の精査を行ひ、兼て又縣で實施した東諸縣郡八代村六野原古墳出土品の調査に従事した。これ等のうち持田古墳群のそれは殆んど全部の内部構造と副葬品を辿り得ることが、外形の示す所に併せて遺跡の地域的な調査の上に云はゞ標本的な知見を齎したことを記す可きである。

後の回は一月五日出發、梅原教授、小林助手、角田副手、及川大學院學生の四名が寫眞室の高橋囑託と共に先づ玉名町江田町に赴いて、同町警防團の援助を受け、前後一週間を費して、有名な船山古墳を中心とする附近古墳墓の徹底的な調査を行ふた。この結果は船山古墳主體の構造を明確にしたばかりでなく、埋葬の經過を推すに緊要な所見を得たのははじめとして、新たに塚坊主古墳に於いて主體たる石室内の棺形部に彩色を施してある事實、並に穴觀音古墳にても埋葬に對する複雑に設備を施した點を究め得たのであつた。右の調査後一行は二手に分れて、梅原、及川、高橋の三名は球磨郡免田町戈岡古墳の調査に従ひ、又小林、角田の兩名は鹿兒島縣櫻島の武貝塚の發掘を行ふた。前者では三日間を費して、鍍金を施した畫文帶神鏡以下極めて豊富な副葬品を藏した同古墳の實際を究めた上後者に合流、この櫻島遺跡の發掘は六日間の作業に於いて、二ヶ所の貝塚中特に繩文式遺跡の方から、稀に見る多數の遺物を得て、南九州の史前の文物を考へる上に重

要な資料を加へることが出来た。なほこの間梅原教授は一日を掛宿那頼娃の製鐵關係遺跡の視察に費し、また歸途肥後下益城郡豊田村の古墳調査を行ふて、一同二十日に歸學したのであつた。是等の調査に依つて得た資料は爾後引續いて教室に於いて整理を行ひつゝあり、その主要なるものは近き將來に教室の報告書として刊行の豫定である。

會報

史學研究會役員交迭

昭和十八年十一月に評議員會を開いて各評議員並に外山委員出席會務を協議した上昭和十九年度史學研究會役員の仕事擔當を左の通り決定した。

評議員那波貞氏に代つて評議員西田直二郎氏が庶務會計擔任に、評議員原隨園氏に代つて評議員梅原末治氏が編纂擔任の主任に就任、新たに評議員藤直幹、同宮崎市定、同鈴木成高各氏がいづれも編纂を擔任することになつた。

また編纂委員愛宕松男、内藤晃、藤岡謙二郎、會田雄次各氏は辭任し、それに代つて藤原利一郎、平山敏治郎(再任)、角田文衛(同上)、兼岩正夫各氏が就任、なほ庶務會計主任として外山軍治氏に代つて不破幹雄氏がこれに當ることになつた。

◇會員動靜

◇入會

京都市左京區松ヶ崎河原田町七 澄田正一氏
福岡縣山門郡柳河町旭町五五 古澤芳吉氏
東京都四谷區霞ヶ岳町一二 井上光貞氏
堺市中之町西四丁二六 福島雅藏氏
(右不破幹雄紹介)

◇轉居

奈良縣丹波市町 三重海軍航空隊奈良分遣隊第十六兵舎 井上肇氏
京都市上京區室町中立賣下ル 那場方 大島襄二氏

◇寄贈交換圖書

國學院雜誌 四九ノ九、一〇、一一 國學院大學雜誌部
人類學雜誌 五八ノ一二・五九ノ一、二 日本人類學會
書 一五ノ二―一二 大連圖書館
考古學雜誌 三三ノ一、一二・三四ノ一 日本考古學會
國際圖書交換參考資料 第一輯、第二輯 帝國圖書館
哲學研究 二八ノ一二・二九ノ一 京都哲學會
歷史地理 八二ノ五、六 日本歷史地理學會
文化 一〇ノ一、一二・一一ノ一 東北帝大文學會
國語・國文 一三ノ一二・一四ノ一 京都帝大國文學會
帝國學士院紀事 二ノ三 帝國學士院
史迹と美術 一五ノ一、二 史迹・美術同政會
萬葉集樂藏書誌(吉岡文庫) 中谷政一氏

- | | | |
|--------|------------|-----------------------|
| 史學雜誌 | 五四ノ一二・五五ノ一 | 史學會 |
| 歷史學研究 | 一三ノ一〇、一一 | 歷史學研究會 |
| 社會經濟史學 | 一三ノ九、一〇 | 社會經濟史學會 |
| 地理論叢 | 第二、三、六、一三輯 | 小牧實繁編 |
| 宗學研究 | 二七 | 大谷派本願寺學院 |
| 長崎談叢 | 第三三 | 長崎史談會 |
| 敦學 | 九ノ一一・一〇ノ一 | 國民精神文化研究所 |
| 民族學研究 | 新二ノ一 | 民族學協會 |
| 東京城 | | 滿洲古蹟古物名勝天
然記念物保存協會 |